

「むさし野文学館」五周年に寄せて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 武蔵野大学武蔵野文学館 公開日: 2024-07-17 キーワード: 作成者: 丹治, 麻里子 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2000354

「むさし野文学館」五周年に寄せて

丹治 麻里子

「むさし野文学館」が紅雲台に建築されたと連絡を受けたとき、文学館の一員として活動してきた者として、大学構内に拠点ができたことを大変嬉しく思ったのを覚えていきます。そして、その拠点が、ただの箱ものではなく、文学にどっぷり浸かれる空間^①となっていたことに驚きました。足を踏み入れると目の前には天井から床まで本、本、本。しかもロフトまであるではありませんか。寝転がってひたすら本を読もうかな？ 展示スペースの貴重な資料をじっくり眺めて時を過ごすのもいいな？ もはやここに住んでしまいたいな？ …この建物を出るのが惜しくなるほど、「むさし野文学館」は魅力的な場所だったのです。その「むさし野文学館」が五周年を迎えたとのこと、とても喜ばしく思います。

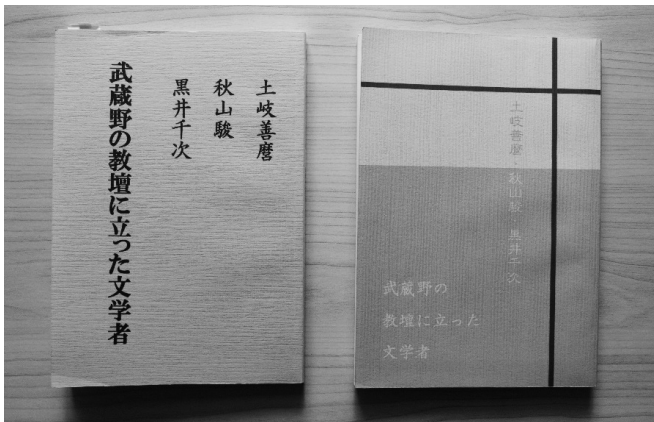
これを機に振り返ってみると、私が武蔵野文学館の活動に携わるようになってはや十年以上が経っていることに気

が付ききました。私的な事情（早稲田大学大学院への通学、就職、東京から福島への帰郷など）で活動に参加できない期間も長くありましたが、それでもこうして長く文学館員として在籍し活動させていただけていることは、とても有り難いことです。

活動内容についても思い出してみることになります。私が武蔵野文学館に迎えられた当時（このときは「武蔵野文学館準備室」、すでに在籍していた在学生・卒業生の皆さんは「土岐善麿」「秋山駿」「黒井千次」の三名の文学者に関し、それぞれの班に分かれて資料を収集・整理したり、文献研究を行ったりというのを主な業務としていました。私は「土岐善麿」について調査する班に加入し、資料のコピーや整理、新聞各社のデータベースでの記事検索等を行っていました。また、ご縁をいただき三鷹市に所在する「三鷹市山本有三記念館」にて臨時職員として数か月勤務させていただいたり、さらには、土岐善麿記念公開講座

特別講演「能と土岐善麿『鶴』を観る」(平成二十九年開催)にて雪頂講堂のステージで一般の方々を前に文学館の活動を紹介する機会をいただいたりしたこともあります。これらはただ安閑と学生生活を送っていたのではおよそ経験できなかつたでしょう。

このような活動の中でも私が一番思い出深いのは、図録の制作です。武蔵野文学館が発行する初めての図録『土岐善麿・秋山駿・黒井千次 武蔵野の教壇に立った文学者』の制作担当者のうちの一人に加えていただいたのです。また、土岐善麿に関しては原稿の執筆もしました。図録どころかそもそも本さえ作ったことのない自分にとって編集作業は未知の領域で、日々PCの画面とにらめっこをしながらか、「本文の文字の大きさと字体はこれ、引用部分は字体を変える、図版とキャプションはレイアウト枠を使つて挿入、扉のデザインはこのようにして、口絵は別のソフトを使って写真と文字を配置して…」と頭を必死に回転させ、主に一太郎を使用して版組をしていました。文学館員の皆さんには、原稿だけでなく、表紙などに使用する絵を描いていただいたり、印刷所については詳しい方に手配をお任せしたりと全員の協力を得、遂に平成二十三年三月十四日に図録が発行されたときは言葉にできないほど感動し、また大きな達成感を味わいました。私にとって文学館での初めての大事な仕事は、こうして無事に終えることができました。



武蔵野文学館初の図録
好評をいただき、「増補版」も刊行した(写真左)

た。この図録はいまもずっと手元に大事に保管しています。

このような活動をしていく中で私がいつも感じていたのは、文学館員として活動する皆さんのただならぬ熱意でした。何を目的とするのか？ その目的を達成するためにはどうすればよいのか？ その成果をどのようにして発表するのか？ など、自ら考え、発言し、行動する、その活発で積極的な姿は私の目にととも眩しく映りました。その姿に触発され、普段は消極的な私ですが、なるべく意見を出したり自ら進んで作業をしたりするように心がけました。

苦労もたくさんありましたが、それ以上に私は文学館の活動が楽しくてたまらず、時には張り切りすぎて行き過ぎた発言や行動をしてしまっただけかもしれません。その点についてはこの場を借りてお詫びをしつつ、それでも私を仲間として共に歩んでくださった文学館員の皆さん、そして何より、常に文学館員をまとめ導いてくださった土屋忍教授に、深く感謝を申し上げます。

最後に、武蔵野文学館における私自身の現在の活動について記します。主として行っているのは、土岐善麿が作詞した校歌に関する調査です。土岐は、特に戦後に、全国各地の学校から依頼されて校歌の作詞を手掛けていました。その情報をできる限り収集し、保管し、研究する、という

ことを目的として、文学館に当初から在籍し指揮を執ってくださいている藤井真理子さんと共にこの作業を進めていくところです。

いま、少子化により全国の学校で統廃合が行われており、土岐が作詞をした学校も複数が統廃合されていることを現時点ですでに確認しています。この数はこれからも増え、そして歌われなくなった校歌は残念ながら忘れ去られてしまっているでしょう。そのような事情を念頭に置きながら、土岐の業績の一つである「校歌」を急ぎ収集し、そしてゆくゆくは長く残る形にして後世に伝えていきたいと思っています。

これからも武蔵野文学館の発展のため、尽力して参ります。